

# 『金瓶梅』における反復描寫について

荒木 猛

## はじめに

知られる通り、一口に「四大奇書」と言つても、『三國志演義』『水滸傳』『西遊記』と『金瓶梅』とは、その成立事情が異なる。『三國志演義』『水滸傳』『西遊記』の三作品は小説として成立するまでに、宋の講釋以來の長い歴史があるのに對し、『金瓶梅』にはそのような歴史はなく、現在は、未だ誰だかわからないある一人の人間が『水滸傳』中の武松物語に興味を持ち、それを材料として百回の小説『金瓶梅』を構想したと考えられている。

この最初にこの小説を構想した人（以下これを作者と稱する）が、『金瓶梅』の大枠を『水滸傳』から借り受けたとして、では百回の構成の細部をどのようにしつらえたのであろうか、大いに興味を持たれる所である。

ところで、近年四大奇書のような長篇小説の敘事構造にどのような敘事美學が働いているかという研究が盛んであり、中でも、登場人物や事件における對偶的配置とその美的効果といった點について、徐々に説明されつつある。

『金瓶梅』における反復描寫について

實は、この長篇小説の登場人物や事件における對偶的配置については、すでに明末清初の小説批評家金聖歎によつて指摘されてきたことであつた。例えば、『水滸傳』において、武松打虎の段に對する李逵殺虎の段、江州城にて法場を劫かすの段に對する大名府にて法場を劫かすの段など、金聖歎はこれらの小説構成の手法を、「正犯法」と稱している。

『金瓶梅』においても、李瓶兒の葬儀に對する西門慶の葬儀、春梅に對する秋菊、温必古に對する水秀才などと、話の局面や登場人物において、對立的にこれらを配置していることが認められる。

だが、これらは一つの場面あるいは類似の場面の再演であつたり、二人の人間の對立的配置だが、實は『金瓶梅』には、同じ場面が何度も繰り返し反復して描かれていることがある。本考では、これを「反復描寫」と稱することとした。

本考は、まず二・三の反復描寫について、その事實を指摘し、併せてその意味する所と效用とについて考察しようとするものである。

ところで、これを考察するにあたっては、張竹坡評を大いに參照した。ただ知られる通り、同評は、「崇禎本」の系統をひく「第一奇書」

に施されたものであり、本考が扱う「詞話本」に施されたものではないが、同評には『金瓶梅』の描寫や構成に關し隨所に廣範圍に互る鋭い指摘があるので、本考では、同評のうち「詞話本」と共通する部分で、かつ反復描寫に關係するもののみを参照した。

尚、本考で用いたテキストは、特に斷りのないかぎり、『金瓶梅』原初の姿を最も良く今にとどめていると考えられる『金瓶梅詞話』本に依つたことをお断りしておきたい。

### 一、反復描寫の(一)——金蓮と經濟の密會

この小説中、同じような場面が反復して描かれていと認められるのは、まず潘金蓮（西門慶の第五夫人、以下金蓮と略稱する）と、陳經濟（西門慶の娘婿、以下經濟と略稱する）の二人が、西門慶（以下慶と略稱する）に隠れて密會する場面においてである。

この二人は最初十八回で、吳月娘の部屋で偶然出會い、この時互いに好意を持つ。その後金蓮は、慶の留守をねらつては、經濟を自分の部屋に誘つて、一緒に食事をしたりする。そして、次の十九回の密會場面となる。

この密會場面を紹介する前に、その密會場所について説明しておきたい。金蓮と經濟の密會は、基本的には人目に付かなければ所を選ばずに行われたが、大體が西門家の廣大な庭園内のことが多かった。その庭園というのは、慶がさきに隣に住んでいた亡友花子虚の邸宅と土地とを買い取り、それで廣くなつた敷地に半年かけて新たに造營し、この十九回で完成したものであつた。

この十九回では、慶はその日、提刑官の夏延齡の誕生祝いに招かれて出かけ不在で、あとに残つた西門家の妻妾達が吳月娘を筆頭に、こ

の新造營の庭園を歩きまわる場面から話が始まつている。金蓮もしばらく皆と一緒に歩いていたが、やがて別れ一人で築山の前の蓮池のそばで、手にした團扇で蝶々を追いかけて遊んでいると、後ろの方から不意に經濟が現れ彼女に戯れる。ここの所は、次のように描かれて

惟有金蓮、且在山子前、花池邊、用白紗團扇撲蝴蝶爲戲。不妨經濟悄悄在他身後後觀戲、說道「五娘、你不會撲蝴蝶兒、等我替你撲。這蝴蝶兒忽上忽下、心不定、有些走滾。」那金蓮扭回粉頸、斜瞅了他一眼、罵道、「賊短命。人聽着、你待死也。我曉得你也不要命了。」那陳經濟笑嘻嘻、撲近他身來、撲他親嘴。被婦人順手只一推、把小夥兒推一交。却不想玉樓在甌花樓遠處瞧見、叫道、「五娘、你走這裡來、我和你說話。」金蓮方纔撇了經濟、上樓去了。原來兩個、蝴蝶也沒會捉的住、倒訂了燕約鶯期、則做了蜂鬚花嘴。正是、狂蜂浪蝶有時見、飛入梨花沒處尋。經濟見婦人去了、默默歸房、心中快然不樂。口占「折桂令」一詞、以遣其悶。

我見他斜戴花枝、朱唇上不抹胭脂、似抹胭脂。前日相逢、今日相逢。似有情實、未見情實。欲見許、何會見許。似推辭、本是不推辭。約在何時、會在何時。不相逢、他又相思。既相逢、我又相思。

金蓮が一人で築山の前の蓮池のそばで、白紗の團扇で蝶を追つて遊んでいると、不意に後ろから經濟がのぞいて「五奥さん、あなたには蝶は捕らえられません。私が代つて捕らえてあげましょう。ところでこの蝶は上がつたり下がつたりして、ちよつと落着きがありませんね。」と言う。金蓮が振り返つてじろりとらむ

と「死にぞこないめ、人に聽かれたら死なねばならないワよ。どうやら命がいらないとみえる。」と言えば、經濟は笑いながら抱きつきキスをしようとして、逆に女に突放されてひっくり返ってしまいました。ところが思いがけずもこのことを、遠くの玩花樓から孟玉樓が見ていて「潘ねえさん、話があるから、ちょっといらっしやい」と言うので、金蓮は經濟をほったらかしにして樓に上ってゆきました。

結局二人は、蝶を捕らえることができなかつた上に、夫婦の約束をしようとして、ただキスをしただけとなりました。正に「狂った蜂といかれた蝶は時より見かけるが、梨花に飛んで入つたら見當たらぬ」とはこのことです。經濟は女が行つてしまつたので、黙々として部屋に戻り、悶々として樂しまず、「折桂令」の唄を口ずさんで、自らを慰めました。

僕が見たあの人は、花の小枝の髪飾り、その唇に紅をさしたかささぬのか、この前逢つて今日また逢つたが、氣がありそでなさそで、許すに似て許してはくれぬ。斷るようで斷らない。逢うというのはいつのこと、逢つてくれるのはいつのこと。互いに逢わねばむこうが想い、逢つたあとはこちらが想う。

この二人の密會の場面には、これを形成する次のような要素が認められるであろう。

- (一)、まず、金蓮が團扇で蝶を追っている。
- (二)、蝶を追うのに夢中になっている金蓮の背後から、不意に經濟が話しかける。
- (三)、次に、經濟が金蓮を抱きしめ更なることに及ぼうとして、何らか

『金瓶梅』における反復描寫について

の邪魔が入り慌ててキスをしただけで終ること。この回では、玩花樓から二人のを見ていた孟玉樓が、金蓮を呼びつけることになつている。

(四)、離れたあと、「折桂令」の曲を入れていること。この曲は、『雍熙樂府』卷十七に見える作者不明の曲を少しもじつたもので、年上の女性の本心を今一つつかみきれない若い男の氣持ちが詠まれている。ここでは明らかに經濟の氣持ちを詠んだものである。

金蓮と經濟は、五十二回でも密會をしている。この回も慶は、安忱・黃葆光という二人の役人の酒席に赴いて不在であった。この慶の不在をこれ幸いと、吳月娘ら西門家の妻妾達が、めいめい飲み食いしながら、廣い庭園内を歩きまわっていた。かくて再び、金蓮と經濟二人の密會の場面となる。

惟有金蓮、在子山後那芭蕉叢深處、將手中白紗團扇兒、且去撲蝴蝶爲戲。不防經濟鷲地走在背後、猛然叫道、「五娘、你不會撲蝴蝶、等我與你撲。這蝴蝶就和你老人家一般、有些毬子心腸、滾上滾下的走滾大。」那金蓮扭回粉頸、斜睨秋波、對着陳經濟笑罵道、「你這少死的賊短命、誰要你撲。將人來聽見、敢待死也。我曉得你也不怕死了、搗了幾鐘酒兒、在這裏來鬼混。」

金蓮だけが築山の裏の芭蕉が茂つたあたりで、手に白紗の團扇を持って、しばらく蝶を追つて遊んでいました。そこへ經濟がうしろから歩み寄つて、いきなり聲をかけました。「五興さん、あなたには蝶は追えません。どれ、私が追つてあげましょう。この蝶は、あなたと同じように毬みたいで、上がったり下がったりして、じつとしませんね。」金蓮は、振り返つて流し目を送り、

經濟にむかつて笑いながら「この死にぞこないの早死さん。誰もあなたに追つてくれなんて言つてないじゃないの。人に聽かれたら命はないワ。どうやら死ぬのが怖くないらしいわね。酒を飲んで、こんな所に來てからみつくとは。」

このように出だしは十九回とよく似ている。ところが、このあと話の展開がいささか込み入っているので、次にかいつまんで述べると、(一)、このあと金蓮は經濟にむかつて、さきにたのんでいたハンカチを買つてきてくれたかと訊ねている。すると經濟は買つてきたと言つて、金蓮にそれを渡し、「六奥様のも買つてある。」と答えている。實は經濟は五十一回で、金蓮と李瓶兒からハンカチの購入をたのまれていたのであつた。

(二)、次に經濟は、金蓮に顔を近づけキスをしようとして、遠くの方から官哥を抱いた李瓶兒と乳母の如意とがやつて來るのが見えたので、それをやめる。

(三)、李瓶兒は、官哥をゴザに寝かせ、そのそばで金蓮とカルタで遊ぶ。

(四)、臥雲亭から金蓮と李瓶兒のこの様子を見ていた孟玉樓は、瓶兒に對し用があるとして手招きして呼ぶ。

(五)、そこで瓶兒は、金蓮に對し「すぐ戻るので、しばらく官哥を見ていてほしい」と言い残して、その場を去る。

(六)、瓶兒が去つたあと、經濟のことが氣になった金蓮は、彼が潛む山洞にむかうと、そこで經濟に抱きしめられキスをされる。

(七)、あとに残された官哥は、そつと近づいてきた一匹の黒猫に驚き泣き叫ぶ。丁度その時、官哥のことが氣になつてやつて來た孟玉樓と

小玉とがこれを發見し、官哥を見ていたはずの金蓮の行方を捜そうとする。

(八)、そこへ、慌てて戻つて來た金蓮は、二人に對し「今小用を足しにしばらくこの場を離れていただけよ。」と、その場を取繕う。

このあと、本文は次のように書かれている。

那陳經濟見無人、從洞兒鑽出來、順着松墻兒、抹轉過捲棚、一直行前邊角門往外去了。正是、雙手劈開生死路、一身跳出是非門。(中略) 原來陳經濟也不會與潘金蓮得手做爲燕侶鶯儔、只得做了個蜂頭花嘴兒。事情不巧、歸到前邊相房中、有些咄咄不樂。正是、無可奈何花落去、似曾相識燕歸來。

陳經濟は、人が居ないのを見て洞よりくぐり出て、松竝木に沿つて角を曲がり、數寄屋の前を過ぎて、表のくぐり門から外に逃げ出ました。正に「兩手でひらく生死の路、さつと飛び出す是非の門」というところ。(中略) もともと陳經濟は潘金蓮と夫婦になろうとしてなれず、一回キスをしただけでおわり、表の相房に歸つても、咄咄として樂しめません。正に「今年も燕は來たに、是非もなや花は散つてしもうた。」というところ。

このあと、十九回で使われた「折桂令」の曲が再び添えられている。この十九回と五十二回以外にも、金蓮と經濟の密會が描かれている箇所がある。それは、五十三回と五十五回、それに五十七回である。極かいつまんで各回の状況を述べると、

まず五十三回だが、その前の回で二人は、李瓶兒と官哥に邪魔をされて想いを遂げることができなかつたので、この回で二人は再び屋敷

内の數寄屋付近で密會しキスに及ぶ。しかし、此の時もまた犬の吠え聲に驚き、二人は慌てて離れる。

また五十五回では、二人はまた庭園内の數寄屋の裏手で逢引しキスに及ぶ。だがこの時も、遠くの方で孟玉樓がジューと自分達のことを見ているのに氣付いた金蓮は、急いで經濟を突き飛ばし、離れる。

更に五十七回では、經濟が何かの用で慶を捜しまわっていた時、數寄屋の所で金蓮と偶然出くわした。それで二人は互いに、まるで猫が魚を見つけた時のように抱きあう。

この他に、密會というまでもないじゃれ合いに至っては、大膽にも慶の居合す場所でもこっそり行っていて、二十四回では、元宵節の夜、慶の催す酒席の末席で二人は、一方が相手の手の甲をつねると、他方が相手の足を蹴るなど戯れる。また四十八回では、清明節の日に一家全員で西門家の墓所へ墓参りに出かけるが、そこでも二人は、墓参りはそっちのけで、官哥をあやして抱く金蓮に對して、經濟が急に抱きつきキスをする。

金蓮と經濟は、このようにしばしば今一步のところ思いを遂げることができないでいたが、慶の死後のある日、金蓮の方から誘って二人は密通し、とうとう思いを遂げる(八十回)。その後も二人は、人目を盗んでは逢引を重ねるが、八十五回で、吳月娘にその密通現場を見られてしまった結果、二人の密會も終りをむかえる。

以上、金蓮と經濟の密會場面について、その概略を見てきたが、それぞれ密會場面に類似点の多いことが氣付かれよう。これを再度まとめてみると、

- (一)、金蓮が庭園内で白紗の團扇を持って蝶を追って遊んでいると、
- (二)、背後より急に經濟が現れ、金蓮に抱きつきキスをする。

(三)、今にも密通に及ぼうとした時、何か邪魔が入り、二人は思いを遂げることなく離れる。

というもので、この三要素がしっかりと出ているのは十九回と五十二回だけだが、例えば、十八回二人が初対面の時、金蓮はすでに白紗の團扇を持っている。五十七回では蝶も團扇も出てこないが、「崇禎本」につけられたこの回の挿繪には、團扇を手にする金蓮が描かれている。また四十八回の墓所での金蓮は、團扇の代りに一本の桃の枝を持っていて、それを環にして經濟の帽子の上にかぶせている。張竹坡の評によれば、この桃には、經濟を挑發する意味がこめられているとす<sup>(8)</sup>。

不思議なことに、金蓮と經濟の密會は、最後まで慶に氣付かれることはなかった。だがもし知れたら、ただでは済まないことを重々知っている二人であった。それゆえにこそ金蓮はいつも經濟のことを、多少ふざげぎみに「賊短命(命知らずの早死さん)」と言っている。實際もしこの密會が慶に知られたら命がないかも知れなかったのも現實であった。かくして二人の密會には、いつも決死の冒険が伴っている。まず二人が逢引の機會をねらって落着きのない様子を、

熬盤上蟻子一般(五十三回・五十五回、まるで燒鍋にいれられた蟻のよう)

と表現したり、二人が出くわすや、まるで盛りの付いた猫のようじゃれ合う様子を

猫兒見了魚鮮飯(五十七回、猫が魚を見つけたかのように)とか、

如餓眼見瓜皮一般(五十五回、餓鬼の目が瓜の皮を見たかのように)と表現している。

## 二、反復描寫の(二)——潘金蓮の孤衾

同じような場面が反復して描かれるのは、なにも金蓮と經濟の密會場面についてばかりではない。西門家の女達の孤衾の描寫においても反復描寫が認められる。

そもそも西門慶という男は、正妻吳月娘の他に李嬌兒・孟玉樓・孫雪娥・潘金蓮・李瓶兒と計六人の妻を持つてそれでも満足できず、廓の遊女は勿論のこと、宋惠蓮とか王六兒といった使用人の女房にまで手を出す男である。従つて六人の妻妾達のうちの誰であろうと、必然的にこの男からの愛を一人占めできない定めとなつており、男が誰かある女性に夢中になつている間は、その他の女達はいつも孤衾に悩まねばならぬ宿命を負つていた。

しかし不思議なことに、この小説を見るかぎり、孤衾に悩む描寫は金蓮と李瓶兒についてのみ、就中金蓮に關する描寫が多く、吳月娘・李嬌兒・孫雪娥・孟玉樓の四人については、そのような描寫は一切ない。まるでこの四人は、慶に對してなんらの執着心を持つてないかのようなのである。このことの意味については四節で考えるところとして、ここでは、その孤衾の描寫がどのように描かれているか見てみよう。

さて、『金瓶梅』における孤衾の描寫を観察すると、二つのタイプがあることがわかる。第一のタイプは、八回と三十八回であり、第二のタイプは、十二回と十七回から十九回にかけてである。まず、第一のタイプの八回から見よう。

知られる通り、武大の妻であつた金蓮が慶と不義の關係となり、邪魔になつた夫武大を毒殺したのが五回のことである。その後金蓮は慶との不倫關係を續けたが、この八回になつてその慶がパツタリ來なく

なる。實は、慶の娘西門大姐が陳家に嫁入ることとなつたことと、慶自身にも縁談がもちあがり、吳服屋の未亡人の孟玉樓を娶つて第三夫人としたりしていたので、自然と金蓮のもとには足が遠のいていたのだつた。

何も知らない金蓮は、毎日氣を揉んでいたが、ある日たまたま家の前を通りかかつた玳安にこれを問ひ質すと、くだんの慶側の事情を話すではないか。これを聴いた勝氣な金蓮は悔し涙を流す。かと言つて、もはや慶から離れるわけにもゆかぬ金蓮は、自らの氣持ちを唄に托し、それを便箋に書きつけ、玳安にかならず慶に届けてほしいとのむ。しかし、その後も杳として慶は姿を見せない。かくして次のような孤衾の一節となる。

那婦人毎日長等短等、如石沈大海一般、那裡得個西門慶影兒來。看看七月將盡、到了他生辰。這婦人挨一日似三秋、盼一夜如半夏。等了一日、杳無音信。盼了多時、寂無形影。不覺銀牙暗咬、星眼流波。至晚、旋叫王婆來、安排酒肉與他吃了。向頭上拔下一根金頭銀簪子與他、央往西門慶家走走、去請他來。王婆道「咱晚來、茶前酒後、他定也不來。待老身明日侵早、往大官人宅上請他去罷。」婦人道「乾娘、是必記心、休要忘了。」婆子道「老身管着那一門兒來、肯誤了勾當。」當下這婆子非錢而不行、得了這根簪子、吃得臉紅紅、歸家去了。原來婦人在房中、香薰鴛被、款別銀燈、睡不着、短歎長吁、翻來覆去。正是、得多少琵琶夜久殷動弄、寂寞空房不忍彈。于是獨自彈着琵琶、唱一個「綿搭絮」爲證。(中略)

原來婦人一夜翻來覆去、不會睡着。

女は毎日、今日か明日かと待ちこがれていましたが、大海に沈んだ石のように、西門慶はちっとも姿を見せません。そのうちいつしか七月も終りに近づき、西門慶の誕生日になりました。女は一日千秋一夜半夏の思いでその西門慶の誕生日に一日中待ちました。杳として音沙汰なく、いくら待っても寂として姿を見せませんので、覺えず齒を食いしばり、目から涙を流しました。晩になると王婆を呼んで、酒肉を出した上、頭から先に金のついた銀の簪を抜き取って婆さんに與え、西門慶の所に行つて、あの人を呼んで来てはくれまいかとたのみました。すると婆さん「こんな晩くに行つても、今は酒が終つてお茶一服というところでしょうから、恐らく旦那は來られますまい。私が明日朝早く、旦那のお宅まで迎えに行つてあげましょう。」女は言つた「おつかさん、きつとだよ。忘れちゃいやよ。」婆さん「あのおうちのことは、この私が見な知つております。なんでしくじるのですか。」この婆さんときたら、金がなければ動かぬ人でしたから、この簪をもらつと、酒で顔を眞つ赤にして歸つてゆきました。女は部屋の中で、夫婦布團に香を焚きしめ、燈をかき立てましたが、なかなか寢付かれず、しきりにため息をついては寢返りばかりうつていたのでした。正に「夜長に琵琶を弾こうとしたが、閨のさみしさに弾くに忍びず」というところ。そこで女は、一人さびしく琵琶を弾きながら「綿搭絮」の唄をうたいました。

(中略)

女は、とうとう一晩中、輾轉反側して一睡もしなかつたのです。

この八回と同じタイプの描寫が、三十八回にも見られる。

『金瓶梅』における反復描寫について

三十七回で番頭の韓道國を都に出張させている間に、慶はその女房の王六兒と密通する。そしてそれより、すっかり彼女に夢中になり、長く金蓮の所には足を向けなかつた。そのところは、次のように描かれてゐる。

不説西門慶在夏提刑家飲酒。單表潘金蓮見西門慶許多時不進他房里來、毎日翡翠衾寒、芙蓉帳冷。那一日、把角門兒開着、在房內銀燈高點、靠定幃屏、彈弄琵琶。等到二三更、便使春梅瞧數次、不見動靜、正是、銀箏夜久殷勤弄、寂寞空房不忍彈。取過琵琶、橫在膝上、低低彈了個「二犯江兒水」、以遣其悶。在床上和衣兒又睡不着。

西門慶が夏提刑の家で酒を飲んでゐる話はしばらくおき、こちらは潘金蓮、西門慶が長い間ちっとも自分の部屋に來ないので、毎日「翡翠の衾は肌寒く、芙蓉の帳は冷ややか」な有様でした。その日もぐり門をあげ放ち、部屋の中で燈を高々ともし、屏風に寄りかかつて、手すさびに琵琶を弾きながら男を待つておりましたが、二更三更となります。春梅に何度も様子を窺わせましたが、さっぱり音沙汰がありません。正に「夜長に筆を弾こうとしたが、閨の寂しさに弾くに忍びず」というところ。琵琶を取つて膝の上に横たえ、低く「二犯江兒水」を弾きながら憂さを晴らしましたが、寢床の上で服を着たままでは、眠ろうにも寢られせん。

この後金蓮は、何度となく春梅に慶が歸宅してないかを確かめさせていたが、やがて戻つて來た春梅の口から、すでに慶は戻つてい

今李瓶兒の部屋に居ると聞くに及んで、慶の薄情さに對する怒りとも、李瓶兒に對する嫉妬心も手傳つて、思わず大粒の涙を流す。

一方李瓶兒は、部屋で琵琶の音を耳にして、金蓮が自分に對して嫉妬していることを痛いほどわかつたので、その夜は慶をなだめて、金蓮の部屋に行つて休むよう送り出す。

さて、以上八回と三十八回とを並べてみると、このタイプの孤衾の描寫には、よく似た道具立てが用意されていることに氣付かれる。

まず第一に、金蓮が慶を待ち焦がれて、夜も寝られないで琵琶を弾いて自らを慰めるということが擧げられる。次に、金蓮が慶の薄情さを知つて、大粒の涙を流すという展開である。八回では玳安の口から、三十八回では春梅の口からそれぞれ慶の薄情さを知らされ、自らのプライドを傷つけられて流す涙である。

次に、第二のタイプの十二回と十七回から十九回にかけてについて見てみよう。

まず十二回の方は、金蓮が西門家に嫁いで第五夫人に納まつて間もなくのこと、慶は今度は麗春院の妓女李桂姐に夢中になり、半月ばかり家に戻つて來なかつた。かくして金蓮は、八回につづいて再び孤衾に悩むわけだが、やがて彼女は、琴童という十五六の小者を見つけ、性の渴きをいやそうとする。だがこのことが日頃より仲の良い李嬌兒と孫雪娥に知られてしまい、この二人が吳月娘に注進に及んだことから、慶の耳にも入つてしまった。慶は、すぐさま琴童を叩きのめした上家より追放した。金蓮に對しても、激怒のあまり彼女を裸にして、自分の前に跪かせ鞭で叩いたが、そのしおらしい姿を見て、情にほどされてすぐに許す。

一方十七回から十九回までは、李瓶兒の話である。瓶兒は、慶と情

を通じたのち、慶と興入れの相談などをしていたが、その矢先、都の大官で慶にとつては遠戚にあたる楊戩が弾劾されて牢につながれ、やがて親族一門にも累が及ぶかもしれないという知らせが西門家に入る。驚いた慶は、ひたすら蟄居した結果、必然的に瓶兒のもとへの足が遠のくこととなつた。なにも知らされていない瓶兒は、慶が今日くるか明日来るかと思うあまり、食欲もなくし、病の床につく。そしてこのあと診察に來た醫師の蔣竹山から慶に關する良くない評判を聞くに及び氣持が變り、とうとう慶に見切りをつけ、代りに竹山と結婚し彼を婿として家に入れて薬屋を開かせる。だがこのことが慶の耳に入らぬはずはなかつた。怒つた慶は、二人のならず者達を使つて、竹山の薬屋に行つて竹山に難癖をつけさせた上に、彼を散々な目に遭わせた。此の時瓶兒はと言えば、夫の竹山に同情するどころか、逆にその男らしくない所に愛想を盡かし、とうとう彼に離縁を言い渡した上、家から追い出してしまふ。その後瓶兒は、改めて頼りになるのは慶のみと思ふに至り、押し掛け女房のような形で一方的に西門家に嫁ぐ。しかし、無論西門家に入つて居心地の良いはずはなかつた。尙も腹の蟲の納まらない慶は、興入れ後三日経つても瓶兒の部屋に顔を見せようともしなかつた。思い餘つた瓶兒は、首を吊つて自殺を試みるが、女中に見つかり一命を取留める。そこでようやく彼女の前に慶は現れるが、彼女を許す氣配はさらになく、逆に邪険にも裸にして跪かせた上、その體に鞭をくらわすのであつた。だが、やがて瓶兒のしおらしい姿に胸を打たれた慶は、すぐ彼女を許してしまふ。

さて、今見たように、孤衾描寫の第二タイプである十二回と、十七回から十九回までは、明らかに類似點が認められる。まず、女性が孤衾に悩むあまり、西門慶以外の男性にとりあえず性の相手を見つける



ことである。十二回の琴童、十八・十九回の蔣竹山がこれに相當すること。次に、このことが慶の耳に入ると、その相手は家から追放されること。十二回の琴童は西門家から追放され、十九回の竹山は瓶兒の家から追放される。更にまた、慶が女の浮氣を知って激怒の餘り、女を裸にした上その體に鞭をふるうがすぐ許す、という點でも共通する。

以上、孤衾の描寫における二つのタイプを見てきたが、この二つのタイプが截然と別のものとして分けられるべきではない。例えば、第一のタイプの八回と、第二のタイプの十七回から十九回までとは、ともに西門慶と關係をもった女性が、西門家に興入れする直前に何らかの事情でそのことが延び、結果として、女性が孤衾に悩むということになっている點で同じで、この點でタイプをまたがって共通している。

### 三、反復描寫の(三)―元宵夜の燈籠と花火

この小説は、第一回の政和二年(一一二二)に始まり、最終回の建炎元年(一一二七)までの十五年間のことが書かれているが、實質描かれているのは、第二回の政和三年(一一二三)から、西門慶が亡くなる第七十九回の宣和元年(一一一八)までの六年間の出來事が描かれているにすぎない。

この六年間に繰り返し反復描寫されるのは年中行事であり、その年中行事のうちでも、一月中旬の元宵節の描寫は、毎年缺かさずに描かれている。もっと精しく言うと、第一回目の描寫は十五回に見え、政和五年の元宵節の様子が、第二回目のそれは二十四回に見え、政和六年の元宵節の様子が、第三回目のそれは四十一回から四十六回にかけて見え、政和七年の元宵節の様子が、最後の第四回目のそれは七十八・七十九回に見え、重和元年の元宵節の様子がそれぞれ描かれている。

『金瓶梅』における反復描寫について

る。そして、西門慶の死を境に、パツタリとこの元宵節のことが描かれなくなる。

この四回の描寫は、同じ元宵節の描寫でも回によって狀況が異なるので、次に各回の狀況をかいつまんで説明すると、

まず第一回目の十五回の方は、西門家の妻妾達が、李瓶兒の招待を受けて、獅子街の彼女の家で燈籠見物する一段である。前節でも觸れたように、李瓶兒は十九回で西門家に興入れするので、此の時はまだ西門家の妻妾の一員ではなかった。

第二回目の二十四回は、始め慶は家で妻妾達と燈籠の宴を楽しんでいたところ、遊び仲間の應伯爵の所から宴會の誘いがあり、應家に出かけてしまう。残った彼の妻妾のうち、金蓮と李瓶兒、それに孟玉樓の三人は、經濟や宋惠蓮なども連れて夜街に「走百病」に出かけ、獅子街の燈籠を見物して歸る。

第三回目の四十一回から四十六回にかけては、政和七年の元宵節のことが書かれている。

ところで『金瓶梅』では、この政和七年のことを書くのに、第三十九回から第七十八回までの實に四十回分もの紙幅が使われている。従つて、この年の元宵節は、一月十二日から一月十六日までを、實に克明に描かれている。ここでは、その一々を紹介することをせず、特筆すべきことだけを指摘すれば、

まず四十一回では、西門家の妻妾達が喬大戸の家での觀燈の宴に招待されて赴き、その席上、西門家の官哥と喬家の長姐とを許嫁とする話がまとまる。四十三回には、喬大戸の親戚で皇族とも縁組みのあるという喬五太々という婦人が、西門家にこの度の許嫁の縁組みについて禮を言いに訪れる。

四十六回は、一月十六日という設定だが、この日は、西門家の人間が三か所に分かれて、それぞれ同時に觀燈の宴を開くという實にぎにぎしいもので、まず慶は、家で應伯爵ら遊び仲間や韓道國ら番頭達と酒を酌み交わしながら、男だけの宴會を開いたのに對し、吳月娘ら妻妾達は、吳大舅夫人の招きで、大舅の家に行つて宴會をし、更に春梅・迎春・玉簫・蘭香ら四人の女中達は女中達で、賁四の女房の招待を受け、賁四の家で宴會をする。

最後の第四回目の七十八・七十九の兩回は、慶が落命する直前の元宵節のことが書かれている。そのせいでか、この年の元宵節の描寫は、それまでのそれに比べてただ淡々と元宵節の出來事が書かれているにすぎず、例えば、七十八回で慶が友人・親戚・同僚の夫人達を自宅よんで觀燈の宴を開いているが、本來なら澤山の御婦人達が集まっているのだから、もっと華やかに描かれてもよいはずだが、ここではその事實のみが實に淡々と書かれているにすぎない。また次の七十九回では、馬に乗つて獅子街へ燈市見物に出かけ、ついでに獅子街にある何か所かの自分の店に寄りそれぞれの商賣ぶりを見てまわるが、これも淡々と書き述べるにとどまつている。

以上が、『金瓶梅』における元宵夜の段のあらましであるが、次に、これらの描寫に共通する點を四點ばかり挙げてみたい。

第一に擧げるべきは、これらの元宵節の描寫は、壓倒的に吳月娘ら西門家の妻妾達の宴會についてが多く、西門慶はほとんどそれらの宴席に居ないということである。張竹坡は、これを「女宴」と稱し、四十二回・四十三回・四十五回といずれも女宴が描かれているのに、これらはいささかも重複することなく上手に書き分けられてあり、この作者は太史公司馬遷の生まれ變わりのようだと思つて持ち上げている。

第二は、より華やかな面が強調されているということである。年に一度の燈籠祭の描寫だから、華やかなのは言わずもがなではあるが、今指摘したように、この作品中における元宵節の描寫の多くが女宴であることが餘計にこれらの一段を華やかなものにしてゐる。例えば、十五回では、獅子街の李瓶兒の家の二階から燈籠見物する西門家の妻妾達を、その下を通る黒山のような人々がこれを見て、「あれは、きつと華族のお身内だ」とか「いや、さる高貴な宮様のお妾さん達に違ひない」とうわさしあう一段があるが、これは、吳月娘達が貴族の妻妾と見間違えるような格好をしていたことを示している。

また、元宵節における西門家の宴席には、決して應伯爵ら取り巻きが顔をそろえ、廊の藝妓や歌手、王皇親家おかかえの役者達もよばれ、彼等による燈籠の唄（燈詞）や新春を壽ぐ唄、それに各種芝居は、いやが上にも、その場の雰圍氣を華やかなものにしてゐる。

第三は、第一でも指摘した通り、こうした女宴による宴會の間、西門慶は友人や同僚の家にまねかれて行き、不在のことが多いのだが、女宴の終わる頃を見計らつて、おめあての女性のもとに行き、其の夜は、その女性を抱いて寝るといふのが、パターンのようになつてゐる。具體的に言うならば、十五回と二十四回の女宴のあとは、李瓶兒の所に行つて休み、四十二回と七十九回の女宴のあとは、韓道國の女房王六兒の所に行つて休んでいる。

最後第四は、元宵節に燈籠市の立つ場所が獅子街に設定されていることである。

この作品で獅子街には、西門慶の存命中少なくとも、かつて李瓶兒が買つて住み、後に來旺親子に留守番代りに住ませた家と、韓道國夫妻の爲に買ひ與へた邸宅の他に、絲屋や吳服の店があつたことに

なっている。<sup>(12)</sup> 毎年、元宵節に決つてそこに燈籠市が立ち、西門慶もそこに二・三の店を出していたのは、獅子街が人の集まりやすい場所だったからであろう。しかし九回を見ると、實はこの獅子街というのは、武松が兄武大の仇をとるために西門慶に凶行に及んだ場所でもあつた。となると、西門慶にしてみれば、かつて自分が危うく命を落としたか、いわば鬼門のような場所に、一方では王六兒のような情婦を圍い、他方自らの二・三の店を出していたことになる。作者も、この場所が慶が危うく落命しかけた場所であることを重々承知していたと思われるが、何故あえてこのような設定をしたのであろうか。

張竹坡も、この點に注目して、次のように指摘する。

「獅子街は、すなはち武松仇を報ずるの地にして、西門ほとんどその處に死せんとす。かつて數日ならずして、子虚もまたその害を受く。西門徜徉（さまよい）來往し、後に王六兒ひとえに金蓮をして兩遍もその處に身歴せしむ。小人の托大（うっかり）患を忘れ、惡を嗜みて悔いざるを寫す。一筆にてすべて盡くせり。」（金瓶梅讀法三十三）<sup>(13)</sup>

「數日ならずして（花）子虚もまたその害を受く」とは、花子虚が獅子街に引越して間もなく落命したことを指しているのであらう。それにしても西門慶という男は、かつて自分が命を落としかけた所に、情婦を住ませたり、燈籠見物に何度も足を運ぶとは、一體どういふ神經をしているのか、君子ならば危うきに近寄らぬものを、患を忘れ惡を嗜みて反省しない西門慶の小人としての側面が、これで盡されていと張氏はいう。

確かにかつて自らが殺されかけた場所に、何事も無かつたかのよう

『金瓶梅』における反復描寫について

に、店や家を配置する西門慶の無神經さは、この男の品性を表していることは間違いないことであろう。ただ私は、この作者が燈籠市を獅子街に設定しているのには、もつと他にも理由があるように思う。それは何か。私は、この作者が獅子街という場所を、人欲のエネルギーが集まる場所と考えていたからではないかと推測する。つまり、九回では、復讐のエネルギーが働いた場所としてであり、それ以降は、元宵節の燈籠市で人々の熱氣があふれる場所としてである。また七十九回で慶が落命するのも、直接的には金蓮が彼に淫藥を飲ませ過ぎた爲だが、その前にこの獅子街で王六兒から精力の大半を奪われたことが大きく作用していることを忘れてはならない。

#### 四、反復描寫の意味と效用

これまで『金瓶梅』には、一、金蓮と經濟の密會場面、二、金蓮の孤衾場面、それに三、元宵節の場面、のそれぞれにおいて、回を超えて同じような描寫が繰り返されていることを見てきた。

では次に、この小説の作者は何を企圖してこのような描寫法を用いたのか、また意識的に企圖して用いなくとも、結果的にこのような描寫法によつていかなる效用を持つことになつたかについて考えてみたい。

私は、『金瓶梅』において反復描寫がなされたことによつて、少なくとも次の意味と效用を持つことになつたと考える。

その一は、同じような場面に、決つて同じ事物を書き入れることによつて、その事物に象徴的意味をもたせることになつたのではないかということである。作中に一回かぎり出てくる事物に何か意味を見出すのは難しいが、何度となく現れると、何らかの意味を持つことが多

い。ことにこの小説の作者の場合は、作中一見して何でもないうような事物の描寫もおざりにせず、回を超えて何度となく書き加えることによつて、その事物にながしかの意味を持たせようとしていることが多いので、これを考えてみる必要がある。

張竹坡は、その一例として官哥のおもちゃ博浪鼓（でんでん太鼓）を擧げている。それによれば、この博浪鼓は、作中三回現れるとし、最初は三十二回で、官哥生後一カ月の祝ひとして、薛太監がこのおもちゃを贈つてゐる。次は五十回で、ここになかなか寝付かぬ官哥を、李瓶兒が女中の迎春にこのおもちゃであやさせる一段がある。最後は五十九回で、官哥が亡くなつて出棺したのち、李瓶兒がかつて官哥が寝ていた部屋に行つてみると、このおもちゃだけが寢臺の脇に掛つてゐるのを見て、またひとしきり涙を流す段がある。

張氏は、以上を指摘した上で、作者はこの博浪鼓を官哥の生から死に至るまでを結び付けるよすがとして利用してゐるとする。

では、金蓮と經濟の密會場面における蝶と團扇、金蓮の孤衾場面における琵琶、元宵夜の場面における燈籠と花火などは、回を超えて繰り返し描かれるが、これらの事物にいかなる象徴的意味があるのであらうか。

まず蝶だが、これに、金蓮と經濟という若い男女の浮ついた氣持ちと、輕佻浮薄な行動の象徴としての意味のあることは、容易に察しがつくことであらう。このことは、經濟がしばしば金蓮にむかつて「この蝶は、あなたと同じでじつといたしませんね」と言つて、蝶を金蓮の氣持のたとえとして言つてゐることからも明らかである。また、金蓮の持つ團扇は、ときに桃の枝のこともあり（四十八回）、すでに述べたように、この團扇には男を誘惑挑發する象徴的意味がこめられて

いると考えられる。

では、金蓮が孤衾に悩み、深夜に弾く琵琶にいかなる象徴的意味があるのであらうか。

金蓮は幼い頃、王招宣の家で音曲を習つていたが、琵琶が殊の外上手であつたことが、すでに一回に見えてゐる。そして六回では、西門慶から琵琶の名手だと聞いてゐるとおだてられ、十八回では、陳經濟から琵琶を弾いてくれとせがまれてゐる。だが、この小説の元となつた『水滸傳』を見ると、その中の金蓮に琵琶を弾く心得があつたなどとは一切書かれてゐない。つまり、『金瓶梅』の作者は、金蓮と琵琶という伏線を一回から仕組んで、これに何らかの意味を持たせようとしていたことが考えられるのである。では、それはいかなる意味であらうか。

ところで、琵琶とくれば、まず想起されるのは、胡地にあつてその悲しみを琵琶の曲に托したとする王昭君傳説であり、また、悲しい女の身の上を語る白樂天の詩「琵琶行」であらう。いずれも、女の悲しみのイメージが伴つてゐる。これらのことを考えれば、『金瓶梅』における琵琶にも、作者はこれを女の悲しみの象徴として書き入れたと考へるべきであらう。

では、元宵夜の燈籠と花火には、どのような意味が込められてゐるのであらうか。

前節でも指摘したように、元宵夜の情景を一言で言うならば、『華やか』の一語に盡きる。元宵夜における夜目にも鮮やかな燈籠と花火、獅子街のにぎわい、宴席に居並ぶ美しく着飾つた女性達、またその席に呼ばれた妓女・歌手・役者達による歌舞音曲、これらのシーンが回を超えて走馬燈のように描かれることにより、讀者に鮮烈な情景

をよび起こさせているが、だがこの華美な情景も、七十九回の西門慶の死を境としてパツタリ描かれなくなる。つまり、この小説における元宵夜の燈籠と花火には、「無常」という象徴的意味合いが込められているのではあるまいか。

張竹坡も元宵夜の燈籠にふれて、次のような指摘をしている。

「一部炎涼の書、しばしば燈を寫す。蓋し燈の熱の多時無くして、且つことごとく虛花に屬するを以てなり。以てその炎熱の久しからざるに比する也。」

張竹坡は、『金瓶梅』という小説全體を、「冷熱」の二字で概括した。ここで言う「炎涼の書」とは、『金瓶梅』という小説に他ならない。張氏の言う「炎涼」とは、單に燈籠や花火の光や熱の有無について言っているのではない。熱は、お金や地位があつて榮えて盛んな状態のたとえであり、またお金や地位に羣がる人々の淺はかな心のたとえでもある。涼とは、その反對のたとえで、つまり、張氏の言わんとするのは、ちようど燈籠や花火は華やかではあるが、その光と熱を永く持續し得ないように、お金や地位に圍まれた華やかな生活も長續きしない。この小説で再三燈籠見物の段が描かれるのは、作者が以上のことを讀者に語りかけようとしたものである。

華やかなるもの久しからずが、『金瓶梅』のテーマであるならば、正にこの元宵夜の描寫こそが、そのことを見事に書き示している。

あと一點、このことは作者が意識的に設定したことかどうか、今一つはつきりしないが、若くして世を去ることになる李瓶兒の誕生日が、元宵節の一月十五日になっているのも、はかないこの女性の宿命を暗示しているようにも思えるが、これは穿鑿しすぎであらうか。

次に、反復描寫によつてもたらされる效用について考えてみる。

『金瓶梅』における反復描寫について

それは恐らく、複雑で錯綜する様々な敘事を、反復描寫することにより、回を超えて一貫して何かを照應させ、何かを一つにたばねあげる効果の出でくることであらう。

『金瓶梅』は、『三國志演義』や『水滸傳』のような英雄豪傑譚でもなければ、『西遊記』のような超現實的武勇譚でもなく、ただ西門慶という色と金と權力を追求する市井の一商人と、それを取り巻く妻妾達の極めて平凡な日常譚である。しかも、登場人物は優に六百人を超える。従つて、下手にこれを描けば、讀者にとつては退屈さわりやすい、單なる西門家家庭内における瑣事の平板な羅列に終わる危険があつた。

ところが、同じ場面の描寫が回を超えて繰り返されると、その描寫が前後一本に繋がり強調される。一つ例を擧げるならば、金蓮の孤衾の描寫が擧げられる。

すでに二節で見たように、西門家の妻妾のうち、實際に孤衾で悩む場面が描かれるのは、金蓮と李瓶兒の二人のみだが、中でも金蓮が壓倒的に多い。では西門慶は、金蓮と李瓶兒の部屋にのみ足を運んで、他の四人の妻妾の所には一切行かなかつたかと言えば、そうではなく、極めて珍しいことではあるが、孫雪娥の所には、五十八回と七十六回の二回、孟玉樓の所には七十五回、李瓶兒の所には七十六回それぞれ一回のみ慶が行つて休んだことが書かれている。だがその書き方も、例えば、七十六回の李瓶兒の場合は、始め金蓮の所に行くつもりだった慶に對し、金蓮と大喧嘩したあとの吳月娘が、金蓮の所なんかに行つちやダメと言つたので、

這西門慶見恁説、無法可處、只得往李嬌兒房裡歇了一夜。

そう言われて西門慶は、しかたなくしぶしぶ李嬌兒の所に行つて一晩休みました。

### まとめ

とのみ書かれ、その夜慶を迎えた李嬌兒の對應についての描寫は一切なく、その書き方も、實に素つ氣ない。

つまり、『金瓶梅』をごく單純化して言うくと、潘金蓮の西門家における斗籠を中心に描いた小説であり、金蓮以外で慶と關係をもつ女性達は、すべていわばその出しに使われていると言つても過言ではないであらう。

張竹坡は、これをうまい比喩で次のように指摘する。

「獅子を操るには、かならずその目の前に一つの毬を投げるし、箭を射るときには、一つの的を立てる。これと同様に、金蓮を描こうとして、その他の彼女と籠を争っている人を描かないで、どうして金蓮そのものを描けよう。だから、(宋) 惠蓮だとか(李) 瓶兒だとか如意などを描いているのは、すべていわば金蓮の毬であり、また的として描いているのである。」

以上、反復描寫の意味と效用について、一に、同じ場面に決つてある事物を書き入れることによつて、その事物に象徴の意味をもたせていること。二に、同じ場面を回を超えて繰り返し描寫することによつて、その描寫を一つにたばねる効果をもたらすことなどについて考察した。

そしてその結果どうなったかと言へば、反復描寫された場面にアクセントが加えられ、よりシンプルにわかりやすくなり、讀者にとつても、それぞれの場面を、より鮮明に思い浮かべることが可能になつていゝと言へるのではないか。

これまで、『金瓶梅』における反復描寫の意味と效用について、張竹坡評などを参考にしつつ考へてきた。

今一度これをまとめると、反復描寫の意味として、反復して描かれる場面に使われている小道具に、作者が何かある意味をもたせているのではないかということが擧げられる。

具體的には、金蓮と經濟の密會場面における蝶と團扇には、「浮ついた男女の氣持ち」と「男への挑發」が、金蓮の孤衾の場面における琵琶には、「女の悲しみの氣持ち」が、そして元宵夜における燈籠と花火には、「無常」という意味がそれぞれ込められているのではないかとした。

次に、反復描寫の效用として、『金瓶梅』のように登場人物も多く、敘述も多方面に及ぶ場合、往々、筋立てが複雑かつ錯綜しがちで、讀者にとつてもわかりづらくなる恐れがあるが、このように反復描寫で同じような場面が何度も繰り返し返されることによつて、作者が眞に書きたかつたことを單純に一つにまとめあげ、讀者に明確にこれを伝える效用をもつこととなつたのではないかとした。そして、以上の意味と效用とが互いに作用しあつて、描寫の場面にアクセントが加えられ、印象深いものになつたとする。

私は、この他に、作者による巧みな比喩表現、例えば、

熬盤上蟻子一般(五十三回・五十五回)

猫兒見了魚鮮飯(五十七回)

如餓眼見瓜皮一般(五十五回)

如石沈大海一般(八回)

などや、すでに言及した經濟の氣持ちをうたつた「折桂令」の曲など、こうした様々な道具立てにより、讀者に鮮明な印象を残させることに成功していると考ええる。

最後に私は、作者がこれら同じような場面を描く時に、頭の中に何か決つた繪を材料として持つていたように推測するが、確證はない。しかし、このように考えるのは、今回觸れなかつたが、例えば、西門慶が廓通いするのは、冬雪降る中の描寫が非常に多い。これは、「蝶を追う金蓮の背後より戯れる經濟」「夜中孤衾の寂しさに琵琶を弾く金蓮」「元宵夜の燈籠と花火、それにこれを賞でる女達」などの繪とともに、この作者の腦裏には「雪を踏みしめ廓に赴く西門慶」という繪があつたのではないかと思うのだが、これは今の所、推測の域を脱していない。

#### 注

- (1) この方面の代表的研究に、ブラックス (Andrew H. Plaks) 氏の『中國敘事學』(一九九六年 北京大學出版刊) がある。氏は、四大奇書の敘事構造にも中國の傳統的詩文における敘事美學が見られるとする。
- (2) 『金瓶梅』の作品構成における對偶についての最近の研究に、田中智行氏『金瓶梅』第三十九回の構成(『東方學』第百十九輯所收、平成二十二年) がある。これは、『金瓶梅』三十九回の作品全體における位置づけをふまえて、今回における對偶構成について多角的に論ぜられたものである。
- (3) 金聖歎の「讀『第五才子書』法」に見える。
- (4) このように回を超えて同じことが描かれることを、金聖歎や張竹坡

『金瓶梅』における反復描寫について

は、「草蛇灰線法」とか「長蛇陣法」更には「犯筆」と稱したようだが、いずれもそれぞれの定義が嚴密でないので、ここでは「反復描寫」と稱することとする。

- (5) 一九三二年に中國山西省で發見されたテキストで、文學古籍刊行社より一九五七年に刊行された影印本によつた
- (6) この所「詞話本」では、「慌的那潘金蓮恐怕李瓶兒瞧見、故意問道、『陳姐夫與了汗巾子不會』」として、あわてた金蓮は李瓶兒に見られたと思ひ、わざと「陳兄さんはハンカチをくれましたか」とあるが、この直前まで經濟がこの場所に居たはずなのにこのように訊くのは、やはり不自然である。「崇禎本」ではここを、「慌的敬濟趕眼不見、兩三步就鑽進山子裡邊去了。金蓮恐怕李瓶兒瞧見、故意問道、『陳姐夫與了汗巾子不會』」と、李瓶兒達がやつて来る前に、敬濟(崇禎本)ではこう書くが、經濟のことは、いそいで築山の洞の中に姿をくらましたことにしている。これは所謂、「崇禎本」の筋展開における合理化の一例である。
- (7) この黒猫は、五十九回で金蓮が飼う雪獅子という白猫の伏線であることは明らかで、黒と白との見事な對をなす。このように、この作者は、作中のどんな小さな事物をもゆるがせにせず、なにがしかの意味をもたせていることが多い。
- (8) 張竹坡四十八回評に、「桃者 兆也、挑也。」と見える。
- (9) 第十回に、武松が李外傳を殺害した件に關する清河縣知縣の報告書に政和三年とあることから、逆算推定して政和二年とした。
- (10) 中國の北方の風俗で、正月十六日の夜、女達が百病を退ける目的で、三々五々連れ立って外出する風習。
- (11) 看他一連寫吳大妗子家一席女宴、接寫請衆官娘子一席女宴、又接寫會親一席女宴、重重疊疊、毫不犯手、真是史公復生。(四十三回張竹坡評)

(12) 八十一回に、西門慶の死後これらの店は閉められ、家は賣却されたことを敘して、

那時自從西門慶死了、獅子街絲綿舖已關了。對門段舖、甘夥計・崔本賣貨銀兩都交付明白、各辭歸家去了。房子也賣了。とある。

(13) 獅子街、乃武松報仇之地、西門幾死其處。曾不數日、而子虛又受其害。西門徜徉來往、俟後王六兒偏又爲之移居此地、賞燈偏令金蓮兩遍身歷其處。寫小人托大忘患、嗜惡不悔、一筆都盡。

尙、二十四回の張竹坡評にも、ほぼ同様のことが書かれている。

(14) 夫博浪鼓、一戲物耳。一見而官哥生矣、再現而官哥不保矣。至觀物之哭、乃一點前數回之金針結穴耳。其細密如此。(五十回張竹坡評)

(15) 注(8)を参照されたい。

(16) 王昭君傳説に關する研究に、黒川洋一「王昭君の傳説と文學」(『殖生野國文』二號、昭和四十七年)、山本敏雄「王昭君説話と琵琶」(『愛知教育大學研究報告』五十三、二〇〇四年)などがある。

(17) 一部炎涼書、屢次寫燈、蓋以燈之熱無多時且盡屬虛花。以比其炎熱不久也。(七十九回張竹坡夾批)

(18) 如要獅子、必拋一毬、射箭必立一的。欲寫金蓮而不寫其與之爭寵之人、將何以寫金蓮。故惠蓮・瓶兒・如意、皆欲寫金蓮之毬之的也。(六十五回張竹坡評)